

登壇者のご紹介

戸羽初枝さん

東日本大震災津波で、陸前高田市職員であった長男と、市非常勤職員であった長女、団体職員であった弟を亡くす。震災の5年前の3男の親子会で聞いた防災講演会を記憶していたことがきっかけで、なぜ子供たちは、親族は亡くならねばならなかったのかを調べていくうちに、行政の対応に疑問を持ったことがきっかけで、遺族としての活動を始める。古川沼搜索の署名運動、請願、さまざまな働きかけをするが、どれも叶わず。現在は、震災をきっかけに始めた産直運営を通して活動をしている。

木村紀夫さん

福島県大熊町の海沿いにある熊川地区で生まれ育つ。東日本大震災の津波で自宅は流失し、父と妻、次女が行方不明になったが、東京電力福島第一原発事故により搜索が打ち切られ、その後、次女の汐風（ゆうな）の遺骨の一部が発見されるまで5年9か月を要した。

避難先の長野県から現在は福島県いわき市に拠点を移し、中間貯蔵施設立地区域内に含まれてしまった自宅跡に通い、搜索を継続する傍ら、語り部として活動している。

田村孝行・弘美さん

2011年東日本大震災の津波により、宮城県女川町の銀行企業管理下で息子の健太（当時25歳）を亡くす。企業の管理下で息子が亡くなったことに疑問を感じ、夫婦で活動を開始。企業として従業員に対する働きやすい柔軟な社内の風土・安全管理の向上を高めるために、企業・組織・大学生向けに「大切な命を守る企業防災・組織防災」、「企業・組織のあり方」、小中学生に「いのちの授業」の講演等で、命を第一に守るための啓発と命のバトンを渡す活動を展開する。松島で「健太いのちの農園」も運営中。

義岡翼さん

大阪府吹田市出身。2014年、南相馬市小高区に家屋の片付けボランティアに参加したのをきっかけに、福島県と関わりを持った。2022年、楢葉町に移り住み、震災と東京電力福島第一原発事故から13年が過ぎる被災地で、課題に向き合い、未来に向けた取り組みを進めている。

猪股修平さん

1997年生まれ。仙台市出身。防災士。中国新聞（広島県）を経て、2023年9月より経済誌ダイヤモンドの編集者。中学1年生の時、仙台市内で東日本大震災に遭う。大学在学中に新聞記者を目指す中、田村夫妻と出会う。以後、記者を目指す仲間を中心に延べ数十人を宮城県の沿岸部に案内。

新田健さん

埼玉県上尾市生まれ。防災士。2023年早稲田大学文学部卒、全国紙に入社。福島支局記者。2017年に女川を訪れ、田村夫妻と出会う。震災を追う記者になることを志す。

飯考行さん

専修大学法学部教授（法社会学）。東日本大震災当時、青森県の弘前大学に勤務し、同大学の学生・教員・市民と、岩手県野田村の復興支援活動に参加。女川で語り部をされていた田村夫妻と2015年に出会い、専修大学などで講話を行っていただいている。災害の法社会学を研究している。災害関連の編著書に、『東日本大震災からの復興（3）たちあがるのだ—北リアス・岩手県九戸郡野田村のQOLを重視した災害復興研究』（弘前大学出版会、2016年）、『災害復興の法と法曹—未来への政策的課題』（成文堂、2016年）、『子どもたちの命と生きる—大川小学校津波事故を見つめて』（信山社、2023年）がある。